



人物ゆかりの地を訪ねて～『私たちの女性史年表』から

わたし達ゆう企画は、2014年に『私たちの女性史年表』を発刊し、その後、年表の中で県内に関連のある人物ゆかりの地を訪ねてみました。

先人たちが確かにそこにいた！その場にふれた後には、それぞれが生きた時代と紆余曲折の生涯に関心を寄せるようになりました。今の女性の権利や自由に繋がる彼女たちの活動や主体性を持った生き方には、わたし達を励ます力があると感じています。一方いまだに解消されないジェンダーの問題を考えさせられます。

ここにあげる資料【人物ゆかりの地(県内)一覧表】と【人物 ミニ紹介】はつたないものですが、皆さんの女性史への旅の道しるべの一つになれば幸いです。

楽しみとともに 発見とパワーチャージの旅ができますように !!

【人物ゆかりの地(県内)一覧表】

年号	人物・年表記載の出来事	ゆかりの地・見どころ	参考資料 (*印は電子版あり)
1878 (M11)	イザベラ・バード(1831~1904) 日光小学校訪問	日光市 ・日光小学校は移転 跡地に小杉放菴日光美術館 ・金谷ホテル歴史館(カッティジイン・侍屋敷)イザベラ宿泊先 ・日光金谷ホテル内に写真、資料等展示	『日本奥地紀行』* コミック『ふしぎの国のバード』* 『イザベラ・バードと侍ボーイ』* 『イザベラ・バード旅に生きた英国夫人』
1880 (M13)	山下りん(1857~1939) イコン画を学ぶためにロシア留学	足利市 ・足利ハリストス正教会に11点のイコン画 (足利市重要文化財)〈見学問い合わせは足利市文化課〉	『ネヴァ川のほとり 魂のイコン山下りん』* 『白光』*
1903 (M36)	福田たね(1885~1968) 西洋画を学ぶために上京	芳賀町 ・芳賀町情報館(知恵の環館) たねの作品所蔵 青木繁の「わだつみのいろこのみや」ステンドグラス ・道の駅・芳賀ロマンの湯 福田と青木の紹介コーナー ・ロマンの碑河川公園 「海の幸」モザイク壁画 ロマンの碑(盗難にあい陶製の新しい碑を設置予定) ・栃木県立美術館 青木繁作品「幸彦像」所蔵	『青木繁』 『青木繁と画の中の女』 『悲劇の洋画家 青木繁伝』*

1904 (M37)	与謝野晶子 (1878~1942) 「君死にたまふことなかれ」発表	那須塩原市 ・おしどり歌碑 鉄幹、晶子が塩原来訪時に詠んだ歌の中から一首ずつを刻んだ歌碑	『与謝野晶子歌集』 『与謝野晶子 愛と理性の言葉』* 『与謝野晶子訳 紫式部日記・和泉式部日記』*
1908 (M41)	平塚らいてう (1886~1971) 塩原で森田草平と心中未遂(塩原事件)	那須塩原市 ・森田草平文学碑 事件を題材にした森田草平の小説『煤煙』の一節	『煤煙』 復刻版「青踏」創刊号 『平塚らいてう評論集』
1919 (T8)	大山捨松 (1860~1919) (1871年初の女子留学生として渡米した5人の少女のひとり) スペイン風邪にて死去 現・那須塩原市に埋葬される	那須塩原市 ・大山記念館 (栃木県有形文化財) 〈見学問い合わせは那須拓陽高校〉 ・大山公園 大山元帥墓所参道	『鹿鳴館の貴婦人』 『明治の女子留学生 最初に海を渡った五人の少女』 『会津藩家老・山川家の近代 大山捨松とその姉妹たち』
1938 (S13) 1953 (S28)	皆川マス (1874~1960) 益子焼絵付け土瓶が第1回国際手工芸博覧会で特選 女性初の栃木県文化功労者	益子町 ・益子陶芸美術館 マスの絵付け土瓶(山水土瓶) マスを詠んだ昭和天皇御製の歌碑(揮毫は浜田庄司)	柳宗悦「益子の絵土瓶」 (インターネット図書館 青空文庫)
1949 (S24)	大川波子 (1891~1976) 小俣女子生活学校を閉じ、小俣幼児生活団(保育園)を開設	足利市 ・開園当時の建物 明治初期建造の大川家住宅主屋 (国指定登録有形文化財)〈通常非公開〉	『92歳になる現役保育士が伝えたい 親子で幸せになる子育て』
1951 (S26) 2006 (H18)	吉屋信子 (1896~1973) 『鬼火』で女流文学者賞受賞 栃女高同窓会、生誕110周年記念碑設置	栃木市 ・栃木女子高等学校(旧栃木高等女学校)構内に歌碑 〈見学問い合わせは同校〉 ・湊町ポケットパーク ・栃木市立文学館	『鬼火 底のぬけた柄杓』 『花物語』* 『徳川の夫人たち』* 『ゆめはるか 吉屋信子』* 『乙女のための源氏物語』*
2010 (H22)	柴田トヨ (1911~2013) 99歳で出版した初詩集がベストセラー	栃木市 ・幸来橋 ・栃木市立文学館	『くじけないで』* 『百歳』* 『あなたにありがとう柴田トヨ写真集』

【人物 ミニ紹介】

年表記載年 人物名(生没年)	業績・県内との関連
1878 (M11) イザベラ・バード (1831~1904)	<p>昨年、G7 男女共同参画・女性活躍担当相会合が開かれた日光の地。その日光に 140 余年前に英国人女性イザベラ・バード(旅行家・探検家・紀行作家・写真家)が、横浜から北海道への旅の途中に立ち寄っています。名所や小学校を訪れて、当時の風景や人々の暮らしぶりを、その著書『日本奥地紀行』に書き残しました。滞在先となった金谷侍屋敷(金谷カッティジイン)は、現在「金谷ホテル歴史館」として公開されており、イザベラ・バードが宿泊した部屋も見学できます。彼女は日本の代表的なクラシックホテル・日光金谷ホテルの創業時に大きな影響を与えた一人でもありました。</p>
1880 (M13) 山下りん (1857~1939)	<p>茨城県笠間市生まれ。1887 年開校間もない工部美術学校に入学。翌年ハリストス正教会の洗礼を受けました。1880 年、ニコライ神父の勧めでイコン画(正教の教会で崇敬の対象として掲げられる聖画)を学ぶためにロシアに渡り 2 年間の修行後、日本ハリストス正教会内にアトリエを構えて製作に励み、関東、東北、北海道を中心に多数の作品を残しました。足利ハリストス正教会の 11 点のイコン画は市重要文化財に指定されています。日本初、日本女性唯一のイコン画家です。</p>
1903 (M36) 福田たね (1885~1968)	<p>現在の芳賀町生まれ。明治時代に上京して西洋画の教育を受けた数少ない女性のひとりです。絵の仲間であった青木繁の恋人として知られ、一子をもうけました。が、心ならずも別離。その後、結婚・子育てを経て、再び絵筆をとり力強い作品を残しました。その絵はたねの遺族によって芳賀町情報館(知恵の環館)に寄贈されています。たねの生家近くの五行川のほとりにはロマンの碑河川公園が設けられており、今年 5 月には、道の駅・芳賀ロマンの湯に青木繁と福田たねの生涯を紹介するコーナーが新設されました。</p>
1904 (M37) 与謝野晶子 (1878~1942)	<p>「君死にたまふことなかれ」日露戦争の最中に反戦・非戦の思いを込めたこの詩を発表した与謝野晶子。激しい非難にも毅然とした姿勢を貫きました。文学者としての偉業はもちろんですが言論統制の厳しいなか社会的発言を続け、女性のあり方、男女平等に関する評論にも力を入れています。1918~1919 年にかけて、母性の国家保護を主張する平塚らいてうに異を唱え多くの人を巻き込んで論争を繰り広げました。</p> <p>夫・与謝野鉄幹と共に明治の終わりと昭和の初めの二度塩原を訪れ、塩原を詠んだ二人の歌は 1934 年(S9)発行の文芸雑誌に掲載されました。(晶子の作には平塚らいてうの若き日をしのぶ歌もあります) 温泉街に鉄幹・晶子の歌碑(おしどり歌碑)が建立されています。</p>
1908 (M41) 平塚らいてう (1886~1971)	<p>平塚明(はる/後のらいてう)と森田草平との塩原心中未遂事件。森田はそれを題材に小説『煤煙』を発表し、塩原にはその一節が刻まれた碑があります。らいてうは、その 3 年後の 1911 年に『青踏』を創刊し、発刊の辞「原始女性は太陽であった」を執筆しています。女性解放運動の先駆者として活躍し、エレン・ケイの母性主義思想に賛同して母性の国家保護を主張しました。これに批判的な立場をとる与謝野晶子らと繰り広げた論争は「母性保護論争」として知られています。この論争は、女性の意識、男女格差を生む社会の構造、家庭と職業の両立の困難など、今に続く問題を含んでいます。1920 年には市川房江らとともに新婦人協会を結成して、女性の地位向上・政治活動の自由を求め、婦人参政権獲得にも尽力しました。</p>

<p>1919 (T8) 大山捨松 (1860~1919)</p>	<p>新 5000 円札の顔・津田梅子の盟友大山捨松。旧会津藩家老の家に生まれた捨松は、1871 年 11 歳で津田梅子(1864~1929)らと共に日本初の女子留学生として渡米しました。捨松は帰国後、陸軍卿大山巖と結婚。鹿鳴館での活躍が知られていますが、留学の経験を生かして慈善事業や看護婦の養成、女子教育に力を発揮しました。津田梅子の女子英学塾(現・津田塾大学)開校(1900)にも貢献し、その後も物心両面での援助を惜しみませんでした。が、病気の梅子に代わる塾長を決めてその就任式を行ったのが最後の仕事となりました。1919 年、当時世界的に流行していたスペイン風邪に倒れ逝去。那須塩原市の旧大山農場の一角にある墓所に埋葬されました。</p>
<p>1938 (S13) 1953 (S28) 皆川マス (1874~1960)</p>	<p>真岡市生まれ。こどもの頃から益子焼の絵付けの指導を受けました。女性の絵付け職人は数少ない時代に仕事を続けて、国際的な栄誉を受け、女性初の県文化功労者ともなりました。その間、民芸運動の中心人物たちとの交流をもち、天皇、皇族、首相の訪問もありましたが、マスはどんな時でも淡々と絵筆を動かしていたということです。益子陶芸美術館にはマスの絵付け土瓶(山水土瓶)の展示があり、その敷地内にマスを詠んだ昭和天皇の歌碑があります。</p> <p>近年の益子では女性作家の活躍も盛んで、2022 年には女性初の益子焼焼成型部門伝統工芸士が誕生しています。</p>
<p>1949 (S24) 大川波子 (1891~1976)</p>	<p>足利市生まれ。東京の高等女学校に進学、この時期に知った羽仁もと子の思想に大きな影響を受けました。帰郷後、戦後の荒廃期に女性の教育の為自宅を開放して小俣女子生活学校を開設。(科目は裁縫・料理などの他、英語・古典・音楽・電気アイロンの使用・修理法など)</p> <p>その後、幼児教育の必要性を感じて、「小俣幼児生活団」を開き、自宅を寄付して児童福祉法に基づく保育所として認可を受けました。</p> <p>そして現在、伝統と自然に恵まれた環境のもと子どもの自主性を育む園として知られています。</p>
<p>1951 (S26) 吉屋信子 (1896~1973)</p>	<p>新潟市生まれ。父親の転勤により少女時代を栃木県で過ごした信子は、栃木高等女学校(現・栃木女子高等学校)に入学し、新渡戸稲造の講演「良妻賢母となるよりもまず一人の良き人間に…」という言葉に感銘を受けました。読書を好み、少女雑誌への投稿に励む学生時代を送り、卒業後は教職についたものの文学への夢捨てがたく退職、上京します。</p> <p>人気作家となり 1951 年女流文学者賞を受賞したにも関わらず、文壇での評価は芳しくなかったのですが、フェミニズムの観点からの再評価もあり、昨年(2023)は没後 50 年を機に評伝『ゆめはるか吉屋信子』が復刊されています。(電子版もあり)</p>
<p>2010 (H22) 柴田トヨ (1911~2013)</p>	<p>栃木市生まれ。夫亡き後一人暮らしを続け、90 歳を過ぎてから文芸活動をしていた息子のすすめで詩作を始めました。新聞の投稿欄「朝の詩」に度々掲載されるようになり、2010 年 99 歳で初詩集『くじけないで』出版。世代を超えて多くの人の共感を得て 160 万部を超えるベストセラーとなりました。投稿詩の選者であった新川和江は、この本の序文に「たくさんの応募ハガキの中から、トヨさんの詩がひょっこり顔を出すと、いい風に吹かれたみたいに、さわやかな気分になるのです。」と記しています。詩集の中に、奉公をしていた時代の友人との思い出を綴った「幸来橋」があります。幸来橋は栃木市中心部・蔵の街エリアを流れる巴波川に古くから架かる橋です。2013 年、本と同じタイトルで半生を描いた映画も制作されました。</p>